



末吉小だより

横浜市立末吉小学校

学校だより

令和8年 10月号

わら靴の中の神様から

校長 高山 和宣

感染症や天候不順など、気を配るべきことの多い毎日ですが、保護者や地域の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

さて、異常気象とも言える夏の天候で農作物への影響が心配されました。父方の実家がある新潟県上越市もお米の産地ですが、悪天候の中でも農家の方々の適切な水管理などの努力により、大幅な減収は免れたそうです。「おいしいお米をつかって喜んでもらいたい」という思いとたゆまぬ努力に頭が下がります。

その父方の実家は雪よけのための雁木（がんぎ）と呼ばれる軒を連ねた通りの中にあります。その場所を舞台に、作家の杉みき子さんが書いた『わら靴の中の神様』と言う私の大好きなお話があります。2019年まで教科書に載っていたお話です。

ある雪の日、小学生のマサエは、祖母が編んでくれた不格好なわら靴を恥ずかしく思い、履くのを嫌がります。見かねた祖母は次の様な話をマサエに聞かせます。

「昔、おみつさんという若い娘がいました。その当時、村では誰もがゴムの長靴ではなく、手作りのわら靴を履いていました。もちろん市場ではわら靴も当たり前売られていましたが自分でつくることもありました。

おみつさんは、わら靴ではなくきれいな雪下駄が欲しくなり、わら靴を自分で作りそれを売ってきれいな雪下駄を買おうと思いました。

しかし、少し不器用だったおみつさんの作ったわら靴は、見た目が悪く、市場に出してもだれも見向きもしませんでした。

落胆するおみつさんでしたが、買った人の足が少しでも温くなるように、来る日も来る日も丁寧に丁寧に心を込めて靴を作り続けました。

するとある日、一人の大工の若者がおみつさんが作った不格好なわら靴を買っていきます。若者は『見た目が綺麗でも履き心地が悪い靴が多い中、この靴は足にぴったり合って温かく丈夫で、作り手の思いやりが詰まっている』と絶賛します。見た目の華やかさではなく、使う人を思いやり、心を込めたものには「本当の価値」や「誠実さ」があり、そこには神様が宿っているというお話です。（実はこの話のおみつさんは祖母で、本当の価値を認めてくれたその若者と後に夫婦となります。）

コスパ（コストパフォーマンス）とかタイパ（タイムパフォーマンス）が大切だと言われることが多い今日ですが、末吉小学校の教育も目先の価値に囚われず、本当の価値や誠実さを見失うことなく進めていきたいと考えています。

今月は地域の方を招いての交換給食会や末吉フェスティバル(運動会)があります。それらの繋がりの中で、子どもたち一人ひとりが一生懸命にとりくみ、そして素敵に輝いて欲しいと願っています。